

第一話 野猿の群れ



すこし昔の牡鹿半島^{おしかはんとう}には、たいそう野ザルがはびこっていたんだよ。

その頃は、正月になると、門松^{かどまつ}を迎えに行くんだった。

「門松迎え」といってな、山へ行つて、いい松の木を見つけて、どの枝がいいかを決めて、鉈^{なた}と鋸^{のこぎり}で伐つて、いただいてくるんだよ。たいそうあらたかなもので、「お松をいただきに行く」といって、身体を祓^{はらい}い浄^{きよ}めてから行ったものだった。

ある年のこと、一人の男が鉈と鋸を持って、「お松」を迎えに山へ行つたんだ。

旧正月の十二月だから、天候も静かでおだやかなんだったね。

「一年を占うお松だから、よい松を迎えたいものだ」

松の木の下さ行って、どの枝がいいかと思案して眺めながら、一服つけたんだと。

一服つけて眺めていたら、上から、ぽたっ、ぽたっ、と木の枝が落ちてくんだとな。

「なんだ、おかしいな。風もないのに、枝つこだの葉っぱつこだの、ぽたぽたと落ちてくる」

不思議に思っていたと。

そしたらな、松の木の隣になら榎の木があつて、その枝にサルが何匹もいて、ぽたぽたと木の枝を落としたりして、その男に、ちよっかい掛けてんだな。

何匹もいるから、野ザルの群れつうのはおっかねえんだよ。

「このちくしょう。なじよしたらよかんべ」

男は逃げようと思ったんだと。

そして、そろっそろっど動いたら、そこにあつたふじつる藤蔓さ引っかかって、持ってた鋸の刃が、チャランと鳴ったんだと。

そしたら、サルども、飛び上がったと。

サルつうのは金属の音がうんと怖いんだとね。年寄りからそ

れを聞いていたから、

「さあ、こいつだ」

って叫んで、鉋と鋸を合わせてジャンジャンとはたいて、そうして、サルを追い払ったんだと。

サルの群れに襲われっと、ほんとにこわくてね、命落とすこともあるんだから。

これは実話なんだよ。

それから、サルは小麦や蕎麦といったものが好きなんだよ。

大麦は食べないけどね。

小麦が実ると、穂を取って、そいつを揉んで、両方の手のひら

に乗せて、ぷっと吹くんだって。そうすると実がのこるから、それを食べるんだよ。サルのために、小麦がひとつも穫れなかった年もあったんだよ。

人間もサルも必死に生きていた頃の話なんだね。